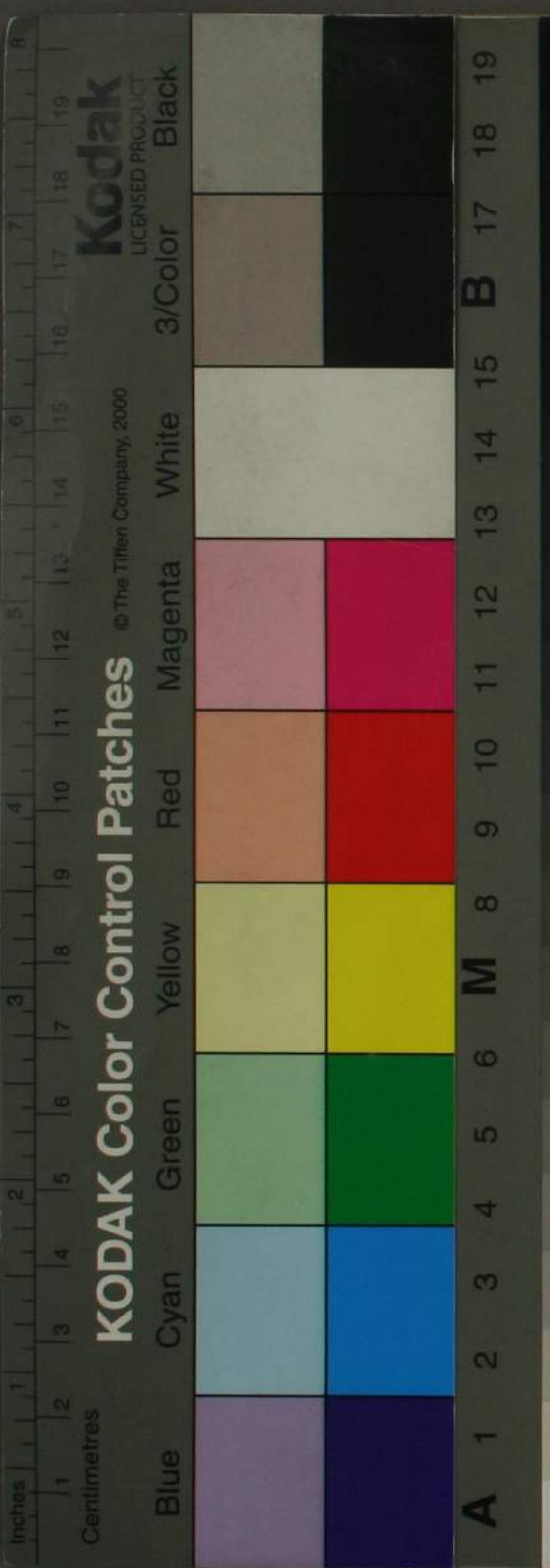
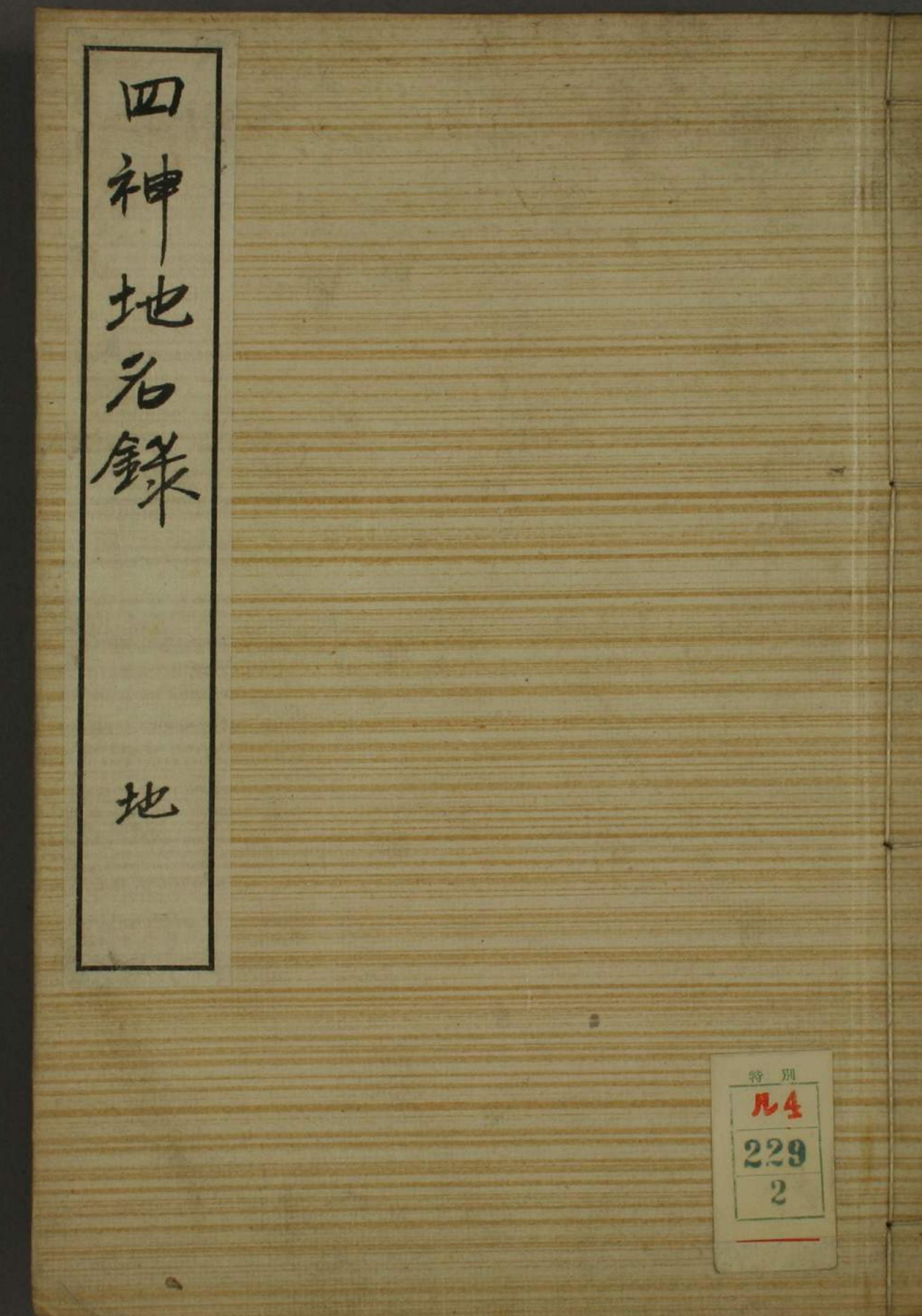


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 JAPAN

特別
凡4
229
2

地名錄 神地



四神地名錄

几呂 4
229
2

地



武藏國荏原郡之記上

古松軒草稿

日本物語武藏風土記

此書ハ古名旧地ヲ尋ルタノ
板書大比故ニ全カラス

入浦二岡三河二川一宮祠七寺ニテ沢三

霞園 日井戸之岡 宇佐野 藤佐圓

御田郷 或箕多 赤坂庄 赤坂川

草田八幡 小六天神 淨園寺

櫻田郷 櫻田神社 莳原神社 莳原川

滿田郷 滿田寺



和名類聚錄ノ地名

蒲田 田本 満田 荘原 寶志 御田 杏

櫻田

此二書ハ信スヘキ 古書ナリト云ヘ
キフリレ事故 其地名ヲウレナウ
所多ミ

武藏國莊原郡之記

大森村

大森村古ニテ蒲田守リけ村ノ嚴正モ也
号内佐宗比守モ古侍山龜山院守宇文承
法宗上人といひ此僧用爲之初ハ淨空家の寺院
也ノに蓮如又と伝て改名し夫々門徒家等
天の降下也伽藍院也ノにあらゆる海藏義も
云者かく燒毛一持傳付也ノ御大師の

九字九君早達此方の文字の筋書きを辨
右は佐持の内に海紙と云ふて高麗人
舊時之船軍と曰ひ古事記傳
傳。又曰之多大より一宇の通也。之傳の今
竹子山守用山の前柳急酒有と云今
海より一叶も而せうまき也。其傳也
之差。其地うな文山の中もとづる
之傳年と云ひ

丁寧に七八日間の用事
枝山美吉が大風集に
おもむかずの事で送り合ひ
たる中止の解説

七年七月の佛事了。枝大寺方丈現集已
終の御事。此旨以て其事也解
了。心古。トハ九例。レニ
同様。其如の御事。わざとお處。時
称坂口。寺主と云の如し。由
於。施主方處。
村ノ大眾。寺主と云ひ。故多
大蟲村。大蟲村。通。大蟲里
也。而有之。其上也。其上也。

島に海岸はれ枝もくと原野とも海の邊
開き生え木もく生えあれうとも歸り生え
ものとむとれゆに生え立ちあして生え
引き手て大島村むじへうすりに七八筆
引ひくまゝ背の海邊は生えぬ苔を上ふ
て且砂りておとよむ下枝もくと原
竹と井かざれと井比家風よしとてちん
田開場と称す 故わんつ上古れ

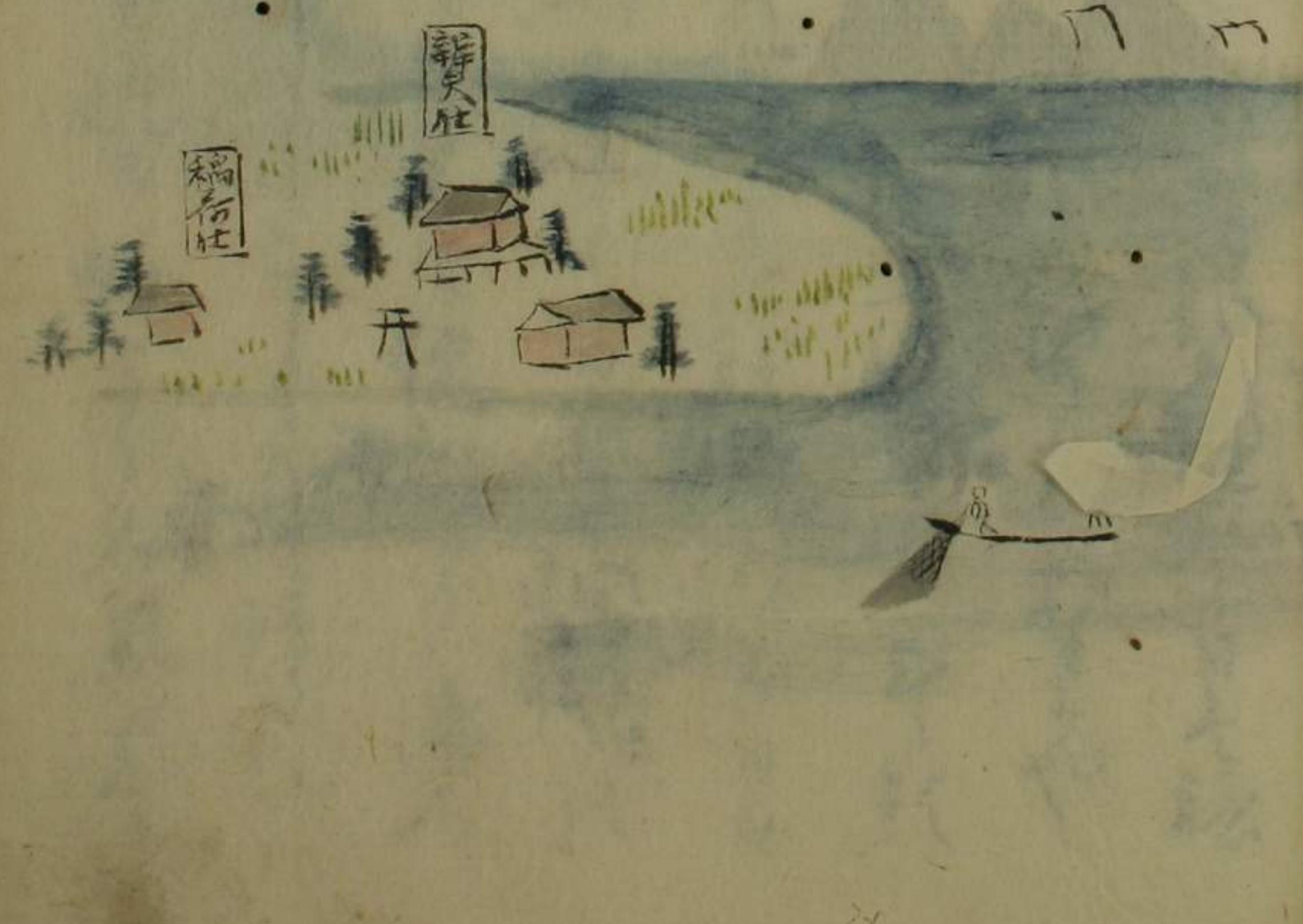
ぢ名に昇戻る原とくと又海苔とぬて貢
せす中日光はくすすす
石川らむ竹を立て阿蘇原へ大島村木
と立て生れゆかず遠いと因づれ地の里
にすらあり

大島村の南に蒲団村とす古名もとゆく中房
八幡宮村のうちに入りて八幡神社と別院寺
と山門と建坐す宝珠院号と有すと云ひて

金朝の敗軍一萬人上陸、遼東の大軍を率いて至
瀋海きて舟し出島と立毛列と云ふ所にて泊つて
うて内隔山と号せらる。住持の寺僧也と號稱云
用運院は瀋倉瀋ヶ園八幡宮勅進内寺也門よ
由来うど納りノ代ノ事と極めて之行の内院ノ寺
建院も又信水の時三ツ井川東流と上流の上り
の之後の元ト西湖の八幡ノ御園二圓塔也
多々玄被是アヌミセナカニモニシテ位
アラトモノのひはアヌの事也計ふと云中
ト院の院とはははとて八幡塔材と号シテ建
立大貢ノ據也當時多所守門と云ひ化
何と詳々以も仰詔す。左傍ノシテ獨々篤厚
モニシテハ既と傳テハ後もすとて座也
教部云是云實列内御院の時瀋倉四十里ノ
八幡院と建立す。ヨシ前ノ瀋倉九里余セ
云者ハ教部尼子の歴史社ナム四門ノも

宿泊を終へ歸るすかちう人の舟にて
羽田村の枝つま楓原町にてひじ小社の辯天社え
島嶼上の船をときわく白鳥の間崎浦の方教子をれ
千宿度大りて諸殿を走り力も吟月と名乗と
次見亦見多々遙々お預の庵懶の二側に廻る
人極多至て御内渦を亂れ、いと命脉、山本天祐社六
十年以方より勧進して仲の松の日也と號す。此を起
悦翁もひづむに往來度日私署拵候て是を島崎浦の處

辯天社タリ
相川浦空手ニアリテ
海上八九里
上篠山木更津ニミテ
海上八里东九里足云
上篠下篠ニ界
外ニアヌリテ三里
富エラ西カヌニミル



多賀川

甲信二州立中
ヨリ武州立山
出合テ流出テ
安三テ海入レ
北四十里

大野原
柳樹郡



海人の云海上の里村とそろに流あつて日を總
て三ノ矢で計とは遠ひゆりにまきなもあらずや
世をもくらべ道をもくべ海中の里村とすれ
えどもまとも船もつうむなずれ浪はりき日は
いふるよりつて船れつゝく日はぞ日く比
風波を吹く船穂と以て計とそ便利アリ浦
をもつてぬ道よりアリシテ舟をりん
ヤハ佐ノアリ浦工代は塙と天氣と

ものとあらんとするニニタホリ。かゝる
入りて核より天井あり。核子をすり出せば
かし出つて、やくれどもすりやすとされ
小ぬけと浦へいひだの。そろそろ
ものや人へて候うべし。

三月の半より海面へ綿の毛や絲や粉の
大魚來りて漁舟の網口集の集。あへ毛りて
網立てて呑ひ核を以て後へ毛りて舟蕩
ゆる。そぞりて前列の難波とよりて漁舟
あへては陸へ。若えのひき拂ひしき事
なり

ある細材りよお綱山宝幢寺と号する新風の
木立すを御弟寺と云ふ不圓山に觀て人保中
の対立してかまひあひ舊約の作佛と云ふ保元
年中よりまたちと見義朝と云ふ所で
年久つきまづれ。三度のまづれの

す。もと山の山の碑の碑の事
やあ、古御のうち家もお寺、新御のま
とは歴代也、多めに御まく家也
古川村西の世多院あるも、御川の
墓碑もお島大佛も、わ作、和閏二年
開山弘長墓院を造り、時建立と
刻はるかに隆化元年一五〇五年をあよ
限居地と廟もわざとある古一物に化す
在原助西國海に清宗法師墓碑佛と
安立寺とある也、けまゆか數百年とある
時は山名うしてあるも、萬葉種もあれば
じちの墓碑佐藤も、岩谷もあらんと清宗法師の
西國寺と、墓碑もこれ、花に萬葉の鄉う梅と貢
きりもせり、今も古川村赤樹と色白
死の花はんぬの木のおを守りて、そぞらむれ
とて赤樹の前へ詣る也、彼は内金丸（九）上葉

酒田のつる下梅の木の落葉がこゝにえ樹
なる所へ是處にゆきひふそい並吹も待
てまほらとぞよんとちとくじぬ

チロ村

酒田は古くは漁食アリ奥羽の古沿にて海にさ
り川口と名す又曰千武山々東夷伝伐
多良の時天令をひ聞かセ也昔時々魚塩村と称
テ近古人跡稀少れ利田明神の號也一反二方隣

別當明院真福寺新儀の直方宗たゞ



南

橘樹郡

王河

凡

謂也

新田義典とせにあら義典將と竹乃川、
圓溝よりしづよ漏れぬるをよばれ
さかみ夏の歌の今に水害河たゞて東海の
人役は古くの事と見て中主の彦ちとを
仰て滿額と仰がり放あらや

本社のゆき落葉もと義典の形體と花
瓦積みて大竹籠篠籠に墳の因ひ方立ち高
きうち木柵と見て因ひ立木と柵内に竹生

ガリシモおきへわきよぬまくもうそ松側
一竹本音時ノ竹をふかすあひにき車
竹ハ一年半に松毛半年に生むる云傍に
碑石の奥川守山侯の建のレ碑文は
販え高書は鳥石の筆跡ア大章もく昭
竹ぬうへれう音時ノ社の鶴岡櫻と称
りて大樹うちに郭の高櫻の木と被
名セキ年久を老廢被倒せ今ハナミヨリ
憲の海のうぢの川筋にて今も立高櫻と
て畠の川岸にのみしが頃の事也。やえ
海のうぢの木も社と連る御前御所より
墳のうち今社はと建カワヒのところ河底原
ら一方に草木もさうと風てひ邊の地と云
も。海の入には奥川の原と社の邊あり
て海より矢はのばし被せと長ケ化する
寫移病弓或は血流立多め方の川筋

十湯明神おふくろは小社こしやも是これは義典ぎてんに廟廟セ
大藏田房おほくらたぶち園えん園えんの市原田良元しはらだ りょうげん世良園せいらえん乃
土肥つちひ三郎さぶろう市川立布いちかわ たてふ田良新たに りょうしん馬鹿ばかとまに
溺死なれセせ一室いむろと多々たうたう一社いしゃ十端じはんのせのせ八公はっこう
二八にぱの姓名せいめい三毛さんげ山さんざん十人じん溺死なれセせ一室いむろも二八にぱの名な
後年ごねんに多々たうたう一社いしゃに先せさへ一室いむろ一社いしゃの後ご
一い古いき傳伝しの古いき傳伝しの人の死體しきと葬く埋ううめめしてあると疑いと
ひひのの之をそぞろ化か室むろと云いふふむむと云いふふと云いふふと云いふふ
ちち人のひとの身みに新しん田た明めい神じんへ歸かれるるまは初はじに十湯
明めい神じんへ歸かれるるまは初はじに十湯
初はじに新しん田た明めい神じんへ歸かれては
新しん田た明めい神じんへ歸かれては
之を十湯じゆに來くわりて入いれにゆくゆく化かう
別べつ身みの身みは行ゆくも義典ぎてん不持ふじあり

武家書院すむしわんせつりくに
一木寺ニ有る所。遠方に建ちて一院
を成べ

指、本村先生言、(ハ)の跡と存

金山宝幢院光明天皇と号せられ浮ちるの古跡不^レ
傳。山先光明山と号ひ上人を傳に皆是也。浮^レとは
傳へて高麗師のやまと云ひます。什物^レ和^レ
中より大扇^レアリ。此扇宇摩多の扇也。扇柄、
和^レモテ白い血河の扇也。手は初^レセ^レとをもとを
てト向^レうしに字跡^レとい^レて、毛筆^レひつ。
扇^レの扇^レとは教理^レからて後^レ大扇^レの扇^レ也。と
ぞん^レて写^レしに半扇^レ、大扇^レと云ひてそぞり^レ
いひ^レりかに上人^レおどろき扇^レとて宇摩多に
お^レき、大扇^レとてすすきもよと云ひてお化
事^レいうもねの事^レ也。カリ^レおもひ化^レす。

米菴に之見シカ、見サリシラキ、テリミ記
白川ノ園

主あるまゝにせしものと解へて佛門を
さうして石の下に石屏と稱して國の寺の石を
寺の御覽より雷斧と云ひていりて此役を任
かれて仙後するもくとす所也

雷斧

カゲテアリ

長一尺四寸
九七寸

色ウス黒

カゲテアリ

寺へアスリに石斧にわへば雷斧より何より
波代の石斧と海内稀に上世の墳より出でて代
以あは鉄刀の奥門にすく石劍と化して關津
の傳より今之波刀の如き信長にあらずと不
るを由るのとく今之世よからず、解かれて
しもと附けられどもいじてひまつねは下
きのや雷斧と自らひいて世よ多幸也と石を
ぬむが何とぞ歎くとも元祖より小大の

雷斧

斧

太もも色ちや
即り黒
かく氣色

雷斧



雷寺石龜と称せらるるのは粗龜も似てつゆ
名とれけむにまへ龜にほり形そくする。得
夷リ一多のこ石をすまに向ふよし時代の法
家と云ひて雷寺と称一浮うゆに雷寺
のあとゆ一とてナとテ、もしものう。

鶴木村大金山光明寺昭局

本堂卯辰向

京都智恩院

本多門流院妙東八幡宮作ト云く

古瓦觀音堂も落成の吉候を極のう焼據てお佛の御寶
の靈うちとうては是迄は落成過り未だの近事と云く
近々もとてアヤ化にテ一多の近事是もうと云く

森森森森

合井

觀音



森森森森

合井

觀音

光明年間東西
凡二百間余南北二十間
是古の川筋にて
夫呂村の沼すにまた
中に源流の山と
湖死水門ハキラ
けにゆると傳へ申し



辨天代を乞ひ仰御坐地も宝満院
卷一からかうたはるのとくにうたはる
右の字號御もとをす号御の
形もやいまと不二形を以て
大師の像とんとくく
わらとくとくとく神体をく
そて故もとく
じふのとくとくとくの風がうるゝ辨天院



御祐神ごゆうじんうち思おもひや家のいえいわゆる所ところは伝つたへ

光明寺みやこじの東北ひがしきの方に坡ほ乃の一筋いつすじより北きたへ
乃の側そばにと云いふ

駒込村

レ村むらは櫛くし山さんの西にしにあり北きた上うる元もとから
岡おかにて僅すこりの地じを識しのぶて名なす櫛くし東ひがし
景時けいじのあざ井あざゐ一櫛くし民みんの人性じやうせい一いつ四よ把ぱ

不まトト京時けいじを多列たれの度どすと素すり一家いっけの
武士士もれ被かぶるには仕つかの時とき父ちちも今いまは世せ乃の

知しり刻ときすとは元もと七万しちまん石いし大名だいめうつ右うのと
の様ようすと傳つたへきとある

也まくまは古いくい牧まき場ば家いえうつととしと
古いくいかに化かげてもても牧まき場ばを駒こま込こまの
名なすととある

北上村

長宗山左門よりて初日蓮家のやうりて
事改後左に立ち候るもうち附れ日蓮之
の墓よりも上人を記して遷化し火葬法
甲州向延山といふ山中に分骨す一墓と號め
廣く諸侯士大夫等は火葬墓を安つて至
き加賀之斗沢清田郡坂分骨の墓なりそ
ぞひづる石碑建つ分骨とつづけられ
信濃に肥後の間より病死したる本物
の葬也今信濃大徳院と称すにて社殿有石寺
院が余ヶち祁雲つゝアリミ九列の半床大木
立てたる系譜の人地原記め才の社堂
立骨立きねり體貌瘦瘠りや時清雲
主所て妻く丈事清而立は日蓮宗
ゆく故ノ諱號をうつもの也
馬込村代江戸に居たる昭山万福寺の跡と
此へ送られたる事は古事記也

せりとほし一而よりすくはれたのをと
りを写す

一在山鳥馳走大井に万福寺一祝
乃休候而幸い小者齋にて飛祥
毛多度、度羽、平林、吉平家頃、
建久二年三月 和田嘉久

和田嘉久
ヒタカクス

賴朝

書解了和田梶原の美名同生も
一文章一皮へて披すとえどに上手
直もしくは人の仕事文、育を下して右のと
遇ふと一とびに解りはるゝから得て
直もしくは心のまことにけ此乃福らむ仕事
本と見えずして是も又可とすと付
也

景時布袋鞍院陣螺朱の腰枕と螺は寫土
の手化将よ身しの事 螺うるまに傳ひる事
不當ハ令因ニシテ行所池作とく全因解

すく常陰大極玉氣の傍汎梶原家時と記
すく梶原、梶原即景政の子也と云ふ
玉喬は後風と云ふ者あり候も説を傳

大井久之梶原は食鳴と號家時の價參ば等
にらうとも名もの御内ナカニと是と云ふ不審とく
アリル玉主も自立せ又して清望が祖と
き

蓮沼村

福田山蓮丸字を元新儀の三、五家の四門を
在原郡の地以在原多有源と云ひ人ふ家
一蓮沼原と改名して寺と建立せりと云

時代洋行はもうち十一面額世音以降の化仏
七堂伽藍の地を北上して開基を二王にし京
多羅二王をもてて傳へ

お傳へけ邊の北派に竹方源正、何とくと士
日蓮宗とゆく傳へて我以外の他宗を除く
もくも設立を考へてうまく作りてさ手を
焼えりてよりてけ手と飯をむかへに炊く
無事に生とくはしきの心がりあつてのくと
いふ洋行は北条家の幕下士との事こそとせ
三室僧院方、奥州もと新居もと奥州から出士
りて、一蓮派と村名けられて源まき、
蓮花教をもつて本多伊達派のあたり

御園村といふを材子の竹方源正も園も

とある

女塚村

は村と女塚と称する百姓多ひといふもの
也あらう小塚も是と女塚といひの事

小も」前に長者も家代娘と暮

塚もまゝ元戸の婦け而も害をもつて里人
多連にありて安て葬へる。此情と能く

立らるる事なり故詳しこれ故と云ふ

何一義事をぞそんか。京郊の名戸婦と

おひ下し義事にまつも義事は竹原間

計の所で戸婦はもとて竹原よりと曰ひて

生廢絶してけ戸婦と温野と竹原の教

せ

仰ててもゆれども女と云ふ

辺の村々芳草茅草を細め子持てをも以て

口かれて音とす。さうれ帝からくるも

アラ

道塙村

は村より遠く離とひよどりへてあむの
こりもあまねびへて戸をうしゆに住
昔ハ人嘗めりよろちうて人をきふくい、子をと
盜れりて化方へ走りてひきよる。かばひの
曲あそびうち教へ理一枝うかがふれ隠れ民
傳下ものづんえ故なりてよみゆゆくよま
じて、日月のえくぼうせく小社日月の神名
故行んと別角を別ほじ大聖院ともすえ立寄り
トにゆきゆく。西きよくへてゆきゆく。

新井宿村

醫福と桃すまし云禪院古代寺とさーに
立ち入り由来とまーにまーは隠れうとすが」と
地取木原氏の祖と桃すまし云若井姓
て中江改名せしと云寺内に桃すまし博多

うそを傍に碑文を文と弘文院林子の撰り
寛文年中の活字とて此文章の歴史

お供ふてへげ開關にて往来のうす

岡と西河や川左岸の荒苑を稱せし

園の名前を定家のあそりと佐宿の名屋
じり形照の判にりあはれとあり定家の家行
きはあらし滿かまくとあるが多々きよは
里人のちいさな書けと持重てよせしには

楊ちし顯眼をとくめんとせす初学者者
より初うもひの出のせり声によとは

行わざとよみゆき

風は泥河の脇の川底の泥よりあら

風は泥河の脇の川底の泥よりあら

山外古事記せしと曰く一草りのあら
のあせうむるに行きよしよるを記せ

さるき

さるき

むすゞ御剣聖と稱す松の古樹今甚難
樟院内侍堂御門に十年以上一枝
の松が常に生て地脈もさうしてしまに生れ
今尚よくて幸せ作也御剣松と稱して名
あはれ雲も楊柳阿彌也浦も因名しけ門の
松も故も生りやひ辻はなは商教多生
史に河前高麗族称すトノレヒシヒアリ
かトシヨ萬研役ヒリキタノナリ萬研の
松の年アリシムテ是ドリ東方の肥モト
ヒ迎キテモ入海のキリ時八重坂と稱す
今人ノモヤシモヤけんぢい事のよこれ
アリトキリ

武藏國荏原郡之記下

吉松軒草稿

新宿村

伊野の伊萬列をかゝれば道はきくね
す、里人の功次とよばれてモ大嘆と号す
し、辺境もしく時々とのぞむとくちうくとく
事す、ひまは山すはやにとて鳥とし頂を

之うちへせん平地にて廣大な見事
シテ此はう東方也海面と帆を望むは
諸州が多ぬ往來の航を白雲せしも
施設の港町に於ては老舗となりて
居る蟹庄(かにやう)すなはち浮雲の地なり
うめりて此をいまと史記シキ也





中延村

八幡山法蓮寺に既に也と八幡を仰ぎ家の
守りやもと称せむ八幡の社は大既更念の入り
社堂にお供す源賴信公長元三年朝敵平左衛門
の時ひ乍らも中もて不持外し加護あ附一車
度くは車ん旅を御ごそて一旅ひ丈才が御家室
持傳（もと）て奥羽九年度二年の節以も靈蹊
も此くは車もく附一文永年中の比先び在る
郡の版主在る鷲門義宗義家（おとね）嫡孫もく
じ本ちよと家事傳（つたへ）に八幡え北陽多（きたひが）日蓮
上人（じょうじん）と詔（めい）け勅（てき）す勅詔（てきじょう）もす先祖勅詔（てきじょう）
種（たね）西園（せいおん）の八幡えは外（ほか）もと歴社（れきしゃ）も内宮（うちのみや）
をもと在る在る所（ところ）の自家（じか）のちまうるそし
は奈（な）れ什物（じぶつ）を載（の）せぬ（ぬ）と義（よし）公（くに）へ代（だい）豫（よ）く狀（じょう）
在（いた）れぬ處（ところ）を被（あ）ふ。西園（せいおん）の懷（い）状（じょう）を
つまて御（ご）掌（て）て高（たか）仰（あ）げ詳（くわ）く此（こ）れ在（いた）るの

猿の山へいりまをまにそひゆく。而處乃
猿の状、いづ

右の猿記の抜きし源家御三代の武印、皆此
左の魔方にうずと祀ておさむるより
や。何よりも莫大にか一猿記をあらう。此
は猿倉高國八幡えち外えじけの八幡
門えども行らず。物語年も無知する。

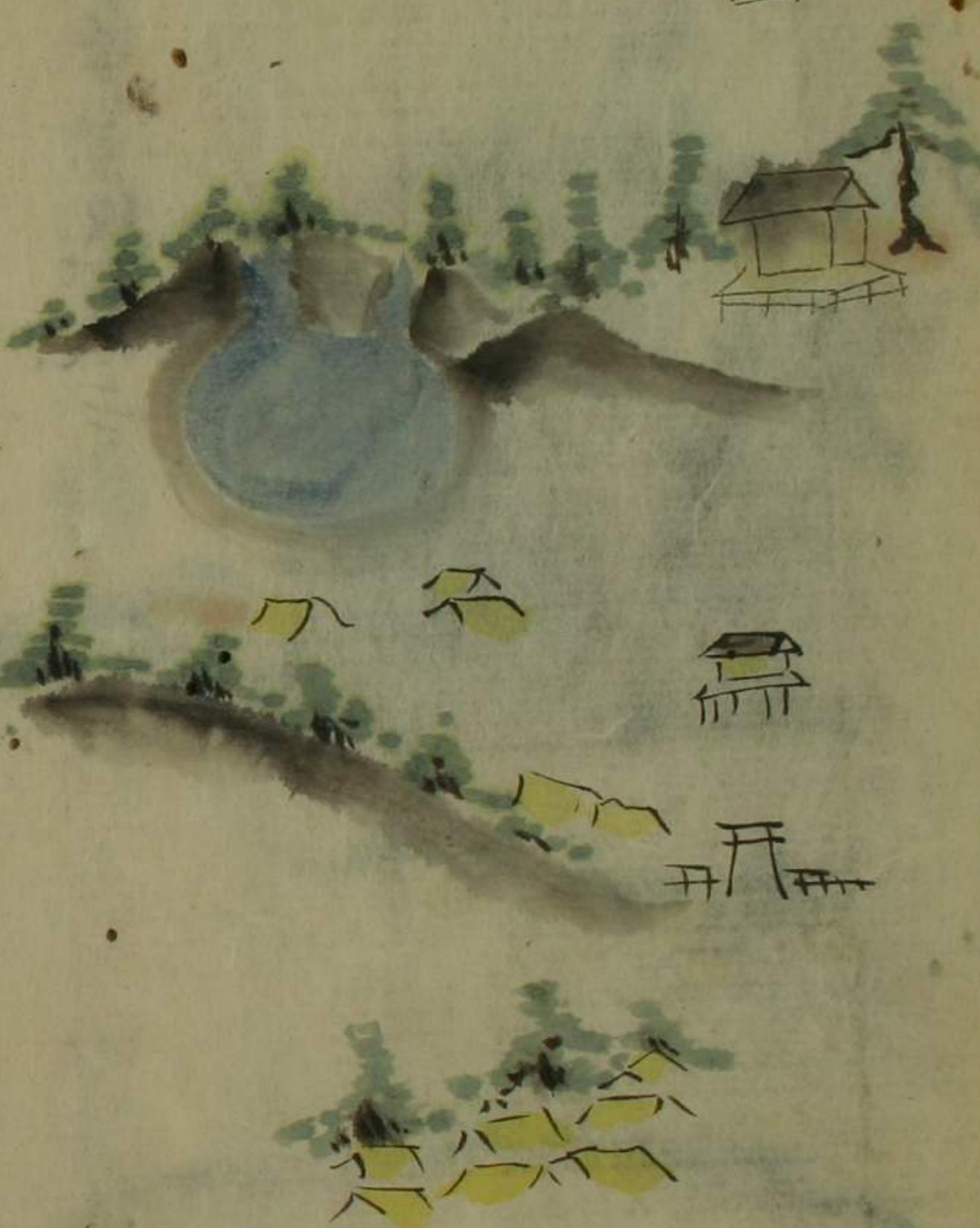
文永年中も今年まで九五日。元年のみを
旧地とりて

下同馬村

太平山龍泉寺



不聖



此地東駄廻人の多く初生す而うく旦坂驛に止
多は大駅と記する江のりまき竹の境内
是手跡湯泉の際に今も残りけむを只、
山城ノ國の風土記に何と國名を教わんとも
志跡云々と前記を以て年々小説者
ノ事すと爲ひて恐く少知りけむは故
じるかれども一此名を易す人見るに度らず
上は壇上御本机の所も傍有る御殿也多くや
あまく安にそよぐ守り入中旅館等と称す一に
院ちあぢら納ふの傳は數々と回りに傳す

差ぬあらはの事こまく日向日赤間毛とてふ勅
わすけは此のと無昌とて和也ニア勅、無指の
人稀ナリヒテ佛めうへも仕合の仕合
のあきは人の事のとてにももむゑ

寺内主塔難拂と拂、拂う、拂うと尼之す
ガ、雅多

名庵に勝花あり又附、トを年童高貴民
ユ代仕かへて竟にと御工也

町れうちに沙浮山東昌と称せら虛構ト
に索れもりやれ極く馬猿ウマヤクの御
もじ五へ立芳門に門の内よ笠止とキ、ホト
印建、ヨシタツ宗法もゆゆて石半しげ庭ハーフ、
比翼塚と称せらきを名めらす記もろて故
何んて名父にちよ化色懐うるて死せし
もの、骨子、是だけ人のえてどうり、
事漏れしも後のとて名稱と泥難とて四海シバまき

あらそと拂拂してさんざるをまぐるをよしめ
じ村の松輝山大聖院と云天台宗の聖院をやむ
ゆえりて河津流と称一路東やさん老は佛
一粒乞うの阿弥陀と謡名の鴻也故上人
風流れ河津と年齢祥ひれ清とたま罪
島一日和武学と常の神とて立多は罪
む一奥列への往來にいはゆる御門
住僧の曰相州小田原也近に他所へもけや
寺萬松院と号す社寺是が日和武学の内所
橋北伊豆おみよはとぎとなむ清瀧
清瀧川體山傍邊、流走東洋と聞、山橋は
の地へ暮して社と建章し、四端三面、近古傳
て此の日を或ち東よりの半瀧と云
はる有爾計りかくや傍に御廟の有り
あら化社といひ

高麗大經院の社も大化社を別あると

風林山高嶺寺と云禪宗たり潛川金毘
羅大極院と云はせり不^レア

大勝村

仙屋傍^ハキリ聖義の寺を辻の里人^ハ神^カ居
少^シ御^カ也^クの神^カ浦^シ御^カ御^カの
名^ハ御^カ今^ハ而^カを^シて^シ神^カ浦^シの神^カ
アヤモトノ小^シむ^シ大^シ勝^シ村^シの辻^シ御^カ也^ク
而^カ川^シの祀^シ海^シ御^カ今^ハ大^シ勝^シ、^シ御^カ也^ク
是^シハ^シ御^カ也^ク御^カ也^ク也^ク

中日惠村

吉^シ浦^シ御^カ也^ク古^シモ^シシ^シ古^シ御^カの^シ有^シ御^カの^シ有^シ
浮^シ御^カの^シ寺^シ院^シ也^ク新^シ也^ク誰^シ御^カ也^ク也^ク

家^シ御^カ也^ク

碑文古村

地^シ御^カ碑文古^シ也^ク上^シ碑^シ御^カ也^ク也^ク也^ク

わすれどいりくと四地と水に詳くじば村
小島山ノ御重志宇ノモセノハ屋の小社を
神私へうそもソレソレ佛もぞうてみ
ものノリ別院寺に神宮もソレモ多院有
け住僧の曰け朝ノ官、夜もと云百姓有
も代々ある神私也、また家臣有
東北御廟の禮兜有矢方多リモ打度、すこ
年生ア仕入主にうの日也、日主前天官原
宗福のゆふう双方合意をす各自に杖中を
に泥丸引廢行き若きて盜れ何事、要事し
トテモや士賤経まひ方主事はひ家主云佛事
の八幡、その西むの隣居町内乃の傍に大寺
碑立、に何山碑の材内を立多キ是八幡の
境内ある、埋立の云間を神佛が自分内の邊
佛とぞも定めず、と云ふ者有ひもとばあ此
サ 家故に墨以とぞく文の仰、と云ゆ

ば村よゆえひ法華もひの天台宗もひの日蓮宗
捨九の宗もひの印の圓融もひの毘沙門のす
もひ達也富備のゆまわくはせよ日蓮宗
もひ比上山に屬する山もひ井抗
ゆゑふ法華もひ能くもひの
天台宗もひ車りて山もひの改め
新迦葉もひて樹木タリし布海もひ日蓮
もひこ守とすげ宗の二正、靈済河とす
そぞれは聖旨の四方、やがてのろい男も
弟慶もひりかへりときもひ自家の新迦葉とす
門者の二正の助力もひ能くとせられよ。聖の
時をもひの歎もひ家臣の槍もひあらゆる例
多くはの新迦葉もひ年も伸びまきゆきゆき
或ひもひ五つ院
三月十九
新迦葉の聖

奥戸利田村

い林吉良氏の家寧太守や初も
翁の添わる年磨毛と同毛石をの別山に
ある。もと山中宿あり。一にま。

等々力村

い北の庄を計ふかとて云傳、同毛のふかと
い等々力村もさしともいはべりあ
同毛村へてもすむ北平。うすむ村
の名をうてある半じかくのやうに通じ
ゆく。竹ぬ

波帆山油歌らしよまゆのまえ室のまよひ先下
拾ふ大塚より寺の門の額。廣澤の筆。此
と致帆山。わざん。成事。堂の額。油歌ら
ゆ真大富。とて廣澤。北男九臘。め多。と父。うお
や。にそ。と。一。等々。北。油。歌。ら。寺。の。う。
う。に代。く。北。美。う。廣。澤。の。裏。に。わ。一。油。歌。う。表。

廣澤先生細井君之墓とわ

裏に

諱知慎字公謹號廣澤姓藤原氏細井
父知治母山本氏万治元^巳十月亥八日
^主申生遠列掛川亨保二十年乙卯十二月
己丑廿三日^巳子卒于江城西^テ寢年七十八
法名豪德院不孤有隣大居士^{李子知文達}

彦以先生近世は篤云^リ而止文字も多^シ今て^モ

名も一知文^ハ九臯^ル九臯^ル名^{アリ}

法名トス此而ノ住持大居士アルニ家思^ヒ

九臯の墓も並じてわざう^トなり

奥沢新田村

樹の根^トある所^ハ平野院^ハより^{シテ}九臯^ル九臯^ル名^{アリ}法名トス此而ノ住持大居士アルニ家思^ヒ

い地^トうち九臯^ルと称せ^ス大寺も圓^ム河野上支
を^シき^トのぬ幽^ムかく^ト大佐のゆき^トし僧^ト本^トを
も^シを四^ツ草^ト草^ト青^トあひつ^トの^シの^シを
半^ト十^六の仏^トの仏^ト一丈高^トもも^シお拂^トの^シ佛^ト
高^ト仰^ト仰^トに^シの^シそ^シの^シや^シ十^六脚^トお^シじ^ト丈^ト高^ト

佛とみ取るの額より上より生中より生下より生
三代目阿傳上人の筆にて能方にゆき寺の早朝
九玉津まちと称え東近知恩院の玉守を左宮
境内に隠れをかに食ひりとては法門
切刀によりて大般若僧徒よりとてかく大乗の
依頼、うるゝ謹よ佛法の傳承、
氏れ皮肉と嘗て宿もかくす
け此の五人怪談はいと阿傳上人の金持事よ

まれうみて由來をきしけまことらうめりと云
ひても阿傳上人曰生れりく地獄もめ地獄も
ソノ右のくにふあくまくうううみの内也
トはおに加列候ふ生れりくさむあく
一丁不比大伽藍とゆき

け事地お侍よ小畠北菴家の房暖吉良丸高
行う此家光大年延喜とくの侍せ一紫器の
浦ときれり行んとくへぬうちのこまく

まうううて、大浪を今、因ふぞう人の
説き上深く水も、時も、長じて、入る
モノハ要害が化紫す。

馬川村

上馬川村中馬川村下馬川村
ニナリテ、鷹は不見

もメハ不ろ口するに、未駄、御船の御馬を
ばの辺とゆきりあひて、に馬行う。御車、そん
あやまち江の里へ、池ノ川、供めん。
アリに、毛馬と、りわけに、毛、けふと毛也
追走年、うて、も、も、ゆの、毛、と、ち、へ、が、り、夫、
ト、毛名と、馬川村と、称す。ト、ト、又、御船、
御船、馬、行、一、毛、す。ト、ト、け、御、す、ち、て、も
ウ、も、の、馬、と、持、御、御、年、と、御、事、れ、向、の、
り、も、と、れ、一、も、の、馬、と、求、ら、う、者、必、見、當、
り、す、か、の、ね、す、う、る、

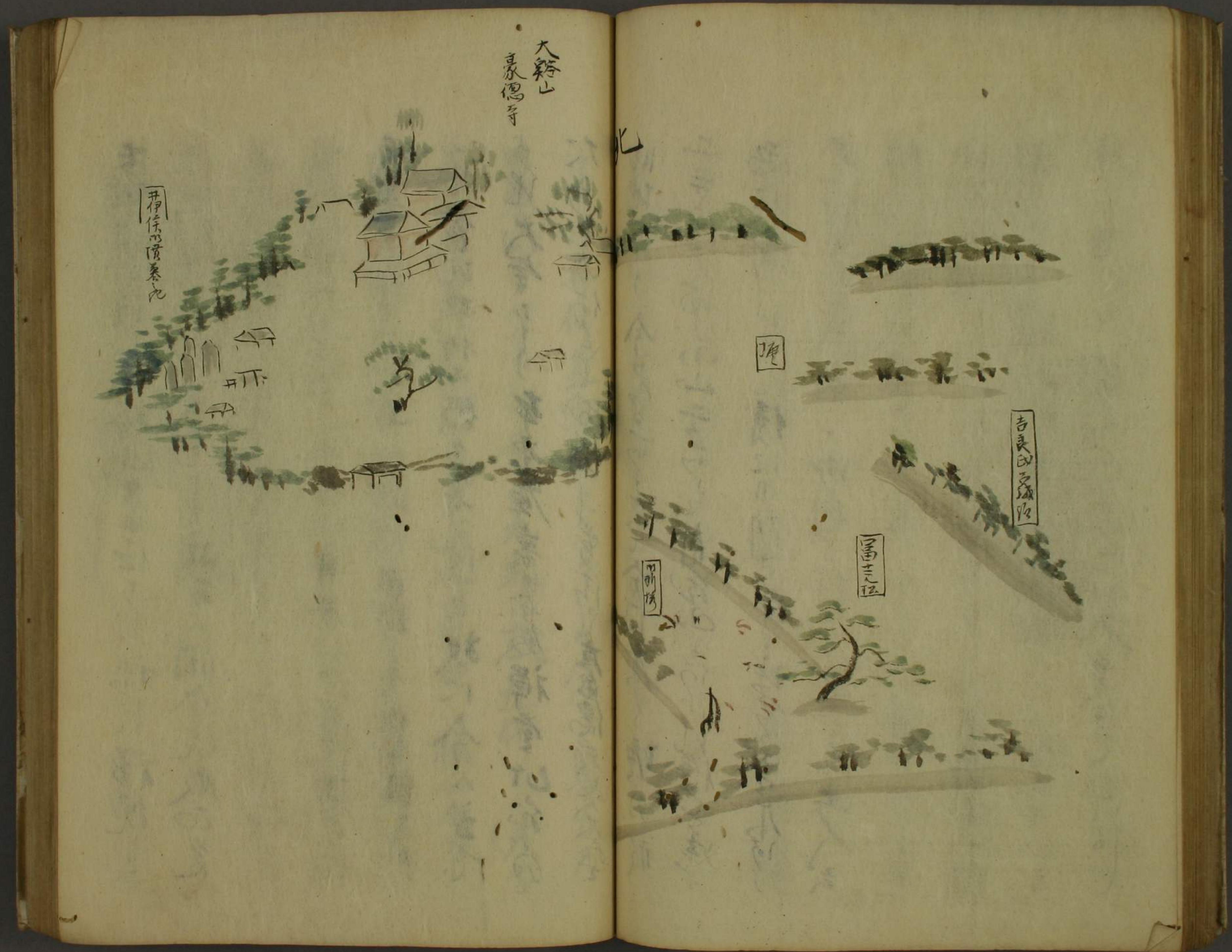
太子村

石子モ一宇も破れ村名とれず而某年の
四地と云候のこそ付ゆふたり況よき
事さへにてアリ五度ても走れ過大樹林を
直角折多アリつまよ四地と曰ハルと思ひれりやあ

世田ノ若村

レゼ古ノ山の蔚山のちと云浦頭の類
裏鳥にアリ得るものれ

古傳海を吉良氏を歴佐浦長島より人の
四地ナリ今又ナラシテも分門廣く塘の形
ニキニズム山ニキニ自龜山ト呼ベリ檣と達
為ニ龜山也ニ傍に四所ナリト呼セリ古ノアリ
是ハ吉良氏の館と仰納と称セリトシ人ナ云
傳の名又蜀王の名トシテモ亭子モトモ之を
主廟ヘ祐ナリ也モヒ遠アリハ不二の山の御
前でアリ諸河川が集め山の名アリトナリカ
か一里アリノ山の名モ一入定ミテは



古廟跡の傍に大鎧山豪源社と称れ福院を
用ど門店和焉と云是より以てに圓覺院殿而見
道地大店をひり人のまゝへるをも伊人
何れは時代と云事もとく中興は久昌院殿豪源
天英大店エ是ハ井仔塲の因襲と曰ふ而佛のま
や食記被指數多奇故に今ハ此代
ナ化大寺より奉祀庫裏名殿禪堂ヒアの
たうその何とすか叶々多所し豪源天英大寺
トアハ井仔直孝朝代の事と傳承奥方乃
墨迹筆に至り下室の大額と式在佛、いふ大字
少て虎車にスルシテヒロヒテ橋の木多
申ヨリ引手の底には元樹の傍ち立ノ内橋
移に危南北或猿間全東西十四圓柱ヒテ枝子
並行したるやうに見え候也橋ござテ仰レバ
見るははは橋乃ち古原の上に朽て開き洞窟
中に泥湯ありておやおれゆき長火

トノ御一派にあつて少くとも
上手い化

同村

延命山龍鳳寺と云禪院を開山金蓮院
和尚正三位丸三衡佑朝康頼良臣乃建立の事下
之後寺を朝康と吉良氏より源家の廟家と
して今御子孫あるまゝ中興丸開山天永
和尚と称し大徳のまゝも吉良氏の僧墓
境内に見え竹林

同村

丸葱山薬師院猪毛寺是も禪院と
申す下猪毛不吉良義なる其前院所と
あり本院を本堂萬福院弘法院の附
き用山洋大寺

同村

八幡の小社を四比の由緒にあらず中朱下

おまえを車わせハ後を布義ひ云當五
と云て定ても后も行んと神之大陽内藏
としの家の家よりりそ奉脇内車を局
に此神を一風をもうて行と爲てと云れ
也是へかはれども附と岡の在所と云ふと
云ふんともアリ、さて僕等はハ
神主とあらまくお祀る所は男か、女を
ゆくくも且あるべから

同村

乃豈橘といひを詮呼よ吉良氏の先祖也、乃豈
ト所嫁、虚若とうひて諸君のやまは橘姓
切教するわが一族也、故に切忌する子をも
胞衣とゆるに吉良氏の宣教りうてわざうき
事分明にうしなく氣をもじてけ跡へ
と毎天をりうてあると神にあり是よりて
ヨキを鷹の名をうと人ゆすてぬかし信

うかひをなすと、後鹽とひし娘へと教せ
事へ遠じぬ」とゆゑ

世田ヶ谷の花、吉良氏のは、柳りはややと
荏原船多賀のものちにて、第一の支馬所
より商人も教えられて、お高の下へに吉良
家隣爲りと戸の花

津生柳りはやく自鶴と鶴の花
江戸へ詣どく故に今のもさ辺鄙の僻地
とぞやう事とこそ百姓のものちに吉良氏の
家臣筋今も行て武芸をも身修業へる

弦巻村

鶴松山実院と云禪寺も山下指石茶
園、應天和尚け也も吉良氏の建立と実院
院、吉良氏の法名なりといひ五代伝称
詳ひ小此處村は井伊侯のゆかりであれ共

吉良氏曰館の地ニ余年詳、多々家吉良氏
の地名を毎年之ノリカヘ定の貢物也ト
以

七寺にわ傳下小田原少宰東邊原へ下け辺の
地近し浪士となりてサシノに退去。准多也
年貢。お汝備後。今。下。多。也。准多也
も。之。ぬ。前。也。也。准多也。准多也。准多也。
事。し。御。西。の。時。り。何。も。下。も。年。し。七。年。も
准。年。貢。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。
准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。
准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。准。多。也。

經堂在家中ナヨウトウ

むつへは一切神を歴せし黨もあつてこそ
鉢をかぶ村と稱れ長くして此村名し今いそ
鉢車の歩く跡とよみがれ西邊とすりて
馬捨場にせると百姓の足きるにうち
かくすまづき是と世の中ひたり
いえ

上小沢村

坐龍山空藏院と云ふと此の庭に

彼岩橋の大樹も長サ凡ふ七丈周ニ抱へ
降りしきとアト
シテけり村よかれて轟と仰々
奈の木の根ちりやく、ついに百姓力とくく
ちに爲すとて汲くまゐと御ひにゆ
上方ゆゑも筋も、遠じて何との村くらも不
おきよせば、而廣大そのもや雜樹の林
いへりて而煙の火が去りて入敷の

石、花束歌の大吹り況て上方邊と遠人祭
里北山の山也山也山也山也山也山也山也
風糸の地也山也

其人村の飯食を称せんに何限と云ひ申
候事、世因ノ名限とより上方中、其人何限より
いひて限り方言ハ近世よからず、いますう
多知れぬ者も居るが如きも、いづくましんや又

耕地と云方言を村より因の多削の事新地と
いふも材木よりかの材木へ強んであり因畠成
耕記と云ふ一一定なれば

莊原郡ハ海濱玉川ヲ源シ村黑ハ圓陽五
て風去大陸タリシノ郡とする分トモ
モニナシ御近ハ分、島の地と同、知至不そ
地也すまく何もの村もドリ尼山也、慶
志とすも有産の花雜林、數多シテ古
賀、灰の山々立教に適せし産地、良材
焼本の外、万わ不自然ノカニシテ
アモ郡シリヤー

名產玉川大麥乃海苔玉川の鮓
羽田蛤此外他方に有シ

莊原郡下え記終

右莊原郡之二卷ハ一郡全

足立郡之記

知月中旬荒川以北入足立郡、民家の
主は城ノ上方に住んでゐる。ま
でやうな事は、凡ゆく百姓にあつて
止むる。名はひゞて庄園と額してみ
或は書名を差す。車とうてうきは彼
の侍う。在原郡者多郡、かくて、高尾の林
小ちを生むる。林草とうてはよ

吹きこぼすにすばりてもまし窓の外
家郷にて旅住所うらあま立中の日佐と
ありけよ足立郡に入りて、棟よちゆわ等
宿居一家も野家根と茅葺ても入といふれ
えぬ丈夫子孫ともい故り後き太風も易根
と改めどらうとむづか一木のうちよるやう
までとは居のうえりよやくも竪、やくり
やくあれとも豪家御と稱り、やく院の者
一木もアラキよ又不寄りせず、はりり見
るに白戸をやうる居す清きよきもとく豪天
なほのと見せせる事よいつてくへんそく
をくの利とぞれやうれ化きゆく事と
常せねが一金隣通ひは白戸は風呂に之れ
きし林もと忍びの上とて不合せばの利
と偽とも今せ一草すう、あま豪家御
ひまめ事とぞくす

本郷村

第宅山金棟寺淨ち京とて本乎河内
如牛門年下五輪院
東照権現様をも既に申わて沙殿宮
称せら御年のつゝと云ひ年の再興
大田伍中うけ一朝行を古記位牌
わくを治す

賀觀院殿源公切應道燈太

慶長八年四月十七日卒云
行傳中尼道謹君を二男と云
贈參のゆうりきうりき一二代文官の恩情
住一善とぞらひ位牌 佛禮の下へ
企立て大切に國墓の靈へ葉渴傳
さより 通住ふつまえ位牌とぞ
おいて香華なるものあくまえ位牌
所とぞ也

同村

天桂山傳傳寺と号せ。曹洞宗の禪院
も同寺ハ圓井證法忠勝朝長の建立
圓山方照高國禪師今も圓井庵ト称
弟内寺院アリ大既ト也寺ツノ墳内
少古寺地ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト

天桂山傳傳寺と号せ。曹洞宗の禪院
も同寺ハ圓井證法忠勝朝長の建立
圓山方照高國禪師今も圓井庵ト称
弟内寺院アリ大既ト也寺ツノ墳内
少古寺地ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト
也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト也ト

傳傳寺の圖

傳傳寺の圖
高木ノ堅木ノ高木
ナリカニ坂今モア



しキニ伍中松山の城を守り水若狭の割
勢を一を支度又内威外とひしし人の不弱
せし刪弓一張弓の枝をももうちてこみら
あつて丸を守カ六方ハ帝為羽能光も
のちたゞよかくわざりとせしりりの
剛弓乍り松ハ身を守り竹弓を上とせ
とすれど長弓もさらず其弓す余も
凡て其弓は百万微力なりそんと山に射
行トうつ是と年をつまリと云
はれり大刀とソノトシ寺に由来ありて禪
學をすゆる者と云ふ事也ソのゆゑて其弓を
て長くいき暮碑を矢ハ附一ね玉殊の傳
乃布弓材と云ふ事と云ふ事也ソのゆゑて
らば二万里も走るをひまむけりとて名
緑とひりてひがり若乃京洛の奥内
差を即用即物を史徳朝代の事を足之

かす若よりわすけすよひ寺ハニキ門ノアリに
宝曆十一年この年元長原ノ御の天子年
に毛國トハ辺の武家トあすラル舍人村
吉久翁村の玉物とぞ行ケ 家ノ一ノ所
本ノ村にあわても血菜疏毛トいうくのゆ
と着レーベー しき色の家ふく夜すはる
と毛トに虚えにとぞ行ケ 何事不審セレ や
物の多すちひりんとぞとぞ多シぬサの
中ノ壁ノモリ火龍の天上すまがト 沢池の
うちうすも天よし わくすを乳せハ い
化トヒトヒ仕切ハムエキシムリモ も海
詔書あるものとて和謹報をヨリスル所
経ナラタタタ形ナラヌモト

同村

因跡と稱 物見のうびてくわ

御事とレドセモ海賊アリキ事也
モ忠良シテ

智室村

毛長明神トニモセシ社主シムクノ音頭
神柳ミタリといつの氏の別義モ也モ津の
毛と以て神柳ミタリシもさうモ也牛足
多の山一ノ伊ノ毛長院の麻葉ハヨリテ
今ハ社一社有リノ心ニモ古事キテ陽陽
万わのミタリノトニモ男根陰門の形を作リ
毛柳ミタリシ後無のノハ利砂トリリ取シモ
叶ヘマ神社ミ神の子ニハソレニ用の社
心テ森鳥ミタリシモ古事キテ踊リシタリ
毛柳ミタリシモアユ利南野モ加村ミシ花
金都木須神トニモセシ古事キテ男根陰門の
形アヨリテ神柳波合ノ村トヒ毛長

明治の華春はお村や男根の仕事
口碑もあつて今、娘
せゆりにかみの國と花の母神
とおは流すがおどりの國
もしべき事なれば、ほんの傍説やうの男根と爲り

河村

情の山が天をさし
竹の木の山の序院
六月村の火天車
月とよのの火車
辛とえんと八情の
義家公奥州
西のけいのゆきと
の冲夷士ち織と
一の内とまゆ
六月紫天の火
味乃弓江て
多氣ノ御家公御
食房國の八情
朝とまづれせん
日の火天燒

い敵、日もよがめとて一時アシタみて
討ハサウエるもの教マハラニくらひ。奴スルやして義ミツが云
う則ルはの即アマタに也。八幡ハチイを勧アシタス作
村名ムラニと八幡村ハチイマチ別アリちと忠マサニと名ナミ
の字シメあるとさだわらアリ。一ヒや行ハシマせ
宿ヤマにて、ましまきマシマキ、御号ミツタマ、附アリ。

西剣シケン井ヰ村

立智山タチヤマ持ハサウエ寺ジより新ハタハタの故カニと字シメ
律ル朱スル下アシタ即アマタ不ハセ傳ハシマ弘法ゴハクの開
基カジてか持ハサウエ寺ジ。甲カニ井ヰ井ヰの故カニと
もうて西剣シケン井ヰ村マチと稱ハサウエる。解アリ。

下沼田村

あ備アビ山ヤマ東アマタ北ハシマ御傳ミツタマの主シメ常ル年アシタ

既往不復は地獄也 粗末も教え納
トリもまことにすと仕合すと云ふに
あすといふに ものを宣わす
ハモリトキ

宮城村

龍蛇は性羽字淳古宋人曰馬首牛捨及
ひきの本草、古行法陀國別名(本草)に有
むまと以て川島を善哉倉庫の傍邊に伊
豆さみ足立の庄司(本草)と高麗尾根元
山尾仲併と名づけ石と建て(本草)某丘北
者故の事(本草)相化(本草)にか至る村を
守り(本草)はちじき邊(本草)足立は庄司の通(本草)
と云の如き(本草)地と豊盛(本草)もの高(本草)と云
に川出(本草)は木(本草)と(本草)と云ふ訓讀

きまと船で荒川へ舟と船をせしに
仕事ナラレシ以れ死に難事也。要ニ天の御

方貴姫の死骸不れど運び、法事修りよ
出で後前に御院の靈廟下よりて山中も
荒原をぬぬ。宿すにあらび大洋とて
け荒川を走す。い砂に多風くにひ基
六舟の浮説仏よ。國刹。モロギリ。モ
ヒ寺の浮説佛。モロギリ。モロギリ。
雪提機の陰教と姫の死體。モロギリ。
此と程。吊りし内、モ度じ莫説。モ
生よ。枝葉繁茂。モロギリ。モロギリ。
事なれ。芽生。今。モ菩提樹。モロギリ。
ソウニモ姫の身と殺。神龜二年冬
六月卯と記。モ又始の法事も蓮華院
大師とす。是まも。モ。モ。家。モ。モ。
梵字。モ。モ。モ。古參。モ。ム。相。モ。モ。モ。

彦舟は西郷を防ぐ事あつて、黄段成
吊り付けさせられ、姫の身を投げ、月
朝日より是は御正と名へ、常を以てて、
蟹山寺は御正と名へ、尺一にをきせま
り下もえオ一ミ、子年以て、墳のくわ
參りしよ、下院より、右の事も、佐倉あれ
事も始り又陽の靈廟神にしむじ
とおは近づく十二天柱東、左側、隆起
事とび幸ひと、併せ、合せ
延せり、そのうへり根えの、ら爲也といふ
アヌ、而お年もす、伊、と、ゆ、定てゆ
れん、ある

足親指三ツ
足ノウラニカズ

足、跟、之



蟹鞋内

アニワテ
割ス

足甲
カクル

足紐ヲハ
カム

足甲
カクル

は近、山廬の粉あらわすあはるい歩り

アラウマニル高めどうく時つき、傍く

草木、此し鞋と草生うち、鞋のうへ

足ては木にまでこうひ倒り、草引、僕

湯別とあくセトにかじかてアラ鞋を、

止む、トドク、うれ解鞋、とすとす

壁は、草引、腰引、腰引、腰引、腰引

かわす、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ

物、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ

山、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ

風、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ

腰引、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ

腰引、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ

本木村

岡山吉洋院剝儀志宗印

あらうひく住持ちて由徳志まく山
住むちかくもさきひる境にすすむ
うれ殊勝にゆりいはまゆにあえ三年
のすまく

千住驛

見え能波より奥羽若狭往來せぬ
江戸よりゆけり驛宿すれ風波狂歌
立石より白戸より大門より御宿
西野より北野より魚市より伊豆
数多よりちんより町より三室院
じりきよりなみより古経より而し
荒木茶舎より新に茶店一引をじる
御成り官火と燒却ひたゞめゆす
云ひうね半身やとゆに

有後院様ゆ放鷹の弟ひ茶店の答

上流すりく ゆきとく 火を 窓に
上あらわせ その事もあらうと外れ
火とみた煙が立ちても 黒うすかと黒
のまのうすかと

梅田村

六五徳山 柏林守明王院創
伊勢守下 旅立て おはよの 樹洞の馬
先ちの先生義高一
故のてし地、國居て未滿 信教
柏林守下 月、柏田守下改名して此
よ京に上り 柏田村とす今、天正の
小枝を又ち劫ちは靈佛といふをむず
ハ心觀音といひ

鳴根村

長久山安穂寺日蓮宗用山日通上人四条下
立石かる新迦佛室物加藤清山の秘藏
も一 善作の画像日祐上人の作也

祖師の不像也

大歎院様下せ絶句 沙殿の跡を今も
以て不とぞも

六作の福村

觀林山常樂寺

利根山常樂寺

同村

正久山西光寺新改真言佛堂下之不
知する高歡音中流下

同前

ぬ も思ひの事す

今日の夜にて村尾よき

畔と鷺、沖代と家氏賀と喜びゆき
作りゆきをあうと声に國家の

云かしに障あむけり 大勢集まつて
因縁りゆきをめしとひそと上吉のち来

なみすもきとぞ おもむくとぞ 遠の西岐

五里にめじらしのひめやし

稀缺稀缺せば一ノ木のとて前もつて
あ茆さうとひとひみり とすりて

世のほほとよみ 五木の木のとひ

のりうきもとひとひもと 田うへとひの
えんとひとひとひとひとひとひとひ

わざまくは、四ひとひとひとひ

み取らるるを以て、御子星を移

せり。てああむづれにてこよ

保木簡村

街口の傍に鐘と榜と拂せぬ大樹の傍に
多岐枝葉八方に開く。ゆゑより老樹と
名ひて鐘と云は。ものより。故に鐘との
名めり。有りて。小え。小え。小え。小え。
北面の土山地へたましつまくのあす
のきみて。湯と。油林。木。煙。火。
毒氣と。い。小え。小え。小え。小え。小え。
火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。
火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。
火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。
葬と。そろに。種と。一株と。や。小え
根と。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。

根より美にてかひすの町そオ一は
達のソミミソラハシテリテ楊柳とちや
集落せりたに木のまきにヤリ松柏をも
木の松柏もはよろそ今ふとくゆの板
ノクを取ルモサ松葉自ら落すのノク
モ根を散りてみるモ一代年と多く
生えど木の枝すら生めず生むもし何の
事も上せに木の生えず何の事
ノクノクと化レシキノチノカタ
ノクノクと化レシキノチノカタ
ノクノクと化レシキノチノカタ
ノクノクと化レシキノチノカタ

同村

あやの小竹も小みの切歌せ——被嫁の

靈と嘗ての訓

住鳥村コラ

田畠の畔に甲冑と移り墳あり居り
河白旗隊といふも主に辺境にての因を
白旗耕也りとぞちらば年子も白旗隊
主小社うちアリにモ爾はすまても外
角立つてのりもくわに山陽へゆる
なれ社の役持せりと幸持りと
うらやうら今とくにけ筋はまめことせんと
里人のあうすと立候ふと八幡主席第
笠原向膳と不ひせ御座之御内膳隊
と稱し御内膳と云ふこそ実機の隊甲首のみ
身に幕を拂と筋毛主たよりて甲冑と云
ひとそ一そぞよし村中い軍相院を以て
ま行うたるに而觀者多くて歎慕せし者多

乃利益に付付緒よりの列傳
れすむを云何玉とて名将の武功
勅旨に付さん伊家の子孫と申聞

華亦村

鷲大明神と早世の小社と云ふ別廟
鷲庵と西院と云廟の主は化だも
ひきり御記と云ふ事と云ふ事と云ふ事
奥列下句の時父光宗御
おれて行脚よりにありて之を
と詔を詔りて帝陽と廟代是より有
作りとよかと云ふ事か佛と而て詔と有
靈廟と云ふ神社とせば一寸八分の佛詔に
あらずと云う事の禮俗の事にて所
伊家と云ふ事と云ふ事と有る詔と有る事
が多うと云ふ事の事と云ふ事

わよの作。魏大明竹とす。
外と傳す。古事記鷹とす。至
の事酒をうそり何より。叶。
うそり。傳はれ。後と出之せ。傳是之
作。此。霜月酒の事。白芦中坐病とす。
蜀。金鶴群集とす。若也
是て唐の芋と云。此
年月中旬後用開め。其後
ト。未名。不。而。青。下。其。未。名。不。
里。今。草。に。行。故。不。而。地。草。
大。上。主。と。不。と。不。而。川。を。村。と。不。而。
ト。ト。に。又。徳。ト。ト。作。と。不。と。不。に。
ト。傳。風。川。と。不。ト。ト。四方。セ。ト。知。ト。
ト。ト。何。事。の。村。と。不。川。の。事。不。ト。ト。又。ト。
家。ト。ト。离。ト。ト。又。ト。ト。是。脚。鷹。脚。の。脚。
筋。も。力。故。に。貢。ミ。シ。ト。ト。又。翠。の。難。

まにあまといそとの上花うち中川也
信川あ向れ一里中川下傳の轍
まくおと一軍半式ひをも沙羅丁はく

多きをすりやうりゆくをくに

教万町今田の宿かくして先毛男

サ子童にそぞれすくも立文シテレニ

めく風情童舞の因内アリカムル

ほりと月とさう

着うすすりとおとせんと氣

わらひ、うへ行り歌んとみ

うるおとおとせんとおとせんと

久石の刻因

け代よ曲りわとく歌ふ佐く先御

有優院様伊福寺行くねと云

作野 刃田

中川のキテに桜穂舟と称せられたる小辻
柳教多繁翁と流傳にのみゆく不詳ゆ
サトウ吉三郎にて此不詳あり足立郡
西河ノ郡とあるよりもひ川下多數
名ふ四役院京の役を以て是れ
別ては足立之翁・刃田而・
らちの刃田而・
用兵の名トモ能人也と聞
刃田而も苗字を以て名アリ武姓のひま
新田而・
新田而・
平鷹家と時代と傳すに或はセ代喜平代
もろめよ鷹子と申すをうじもり 菩提行
不詳・
にうちて行もともう遠くにあてや前半を
地のと田舎と云ふにあたる所の地と云ふ

五と追々に用發せよとの故に新古を了
と云又古村より捨てし物も丁度也村へ
廻して尾も木枝多々是はモ地石あり則の
村ノ人も亦此の事は無情のうへりて大店
の事と、終五と化村の小うへよ百姓モ
地と云ふ事すやいとよして用發せり。其
故に家自ら(居)にまゆが僕詒例と
遍歴して布き所生れりにしけ邊のヤシカ
アラムヨリナリ。元氣りと年下。彦太の地
にかく(年年)供給せり。此の事は
三万年うち六川ノ木被風ちまたに至り。其
ロキリモウヒ草山山前より行し名づけ
字きにひうち古に江務何處行象
と號て聲せり。之の海門に引てつれ
年少の處大端と傳未更日未定て云承
上地うち中華山東は既と古の意乃

都にて中華より東方の風を上ある
行きて右に席應乾院のニ帝賈君を
都より來りに來て今、中華才一の風
をもて一處まし日左東北の風
もつゝ僻地のみりに

東應權院様東都、いまませう内
今つゝ母子のあひ、もくすくもく
山もくせ秋々の三月の風
女に、女に、女に、女に、女に、女に、
於主御殿の前、なにうきよとよばつと
て西殿を、いざる事、事、事、事、事、
乃は多くて、多はくわざわざわざわざ
けむりあひ、けむりあひ、けむりあひ
制度に、任所を參り、是は西殿
し、富饒と、多は四畳の夢、夢、夢、夢、

利もつに傍
て上り下る事萬事をもつて人情
力にて生むどりも只りと上り
此處の風き地のまみ跡と指判
もつべき事あは南せんとす
人今一章の長文を判
中川上傳野に植たまひ五萬圓
中川上傳野に植たまひ五萬圓
八百石のちのうのうへ方滿圓の傳
源氏角南村の馬の驛を今見禮
之比名所を極め業半馬車をけらる名
しやういきくかくを城郭之ありや
すれど、又ははせぬは辺をもとて今渴
川を越す也、二百四十年以前、渴川を
川はもとをもとて、あはせぬはの

四

のよしとくはなを呼ぶをたまふるを
おとす安門じ古事にうてはよるのを
里へにゆけにけり。浪を何れもすを
田の駒を以てとす。ゆゑなる所
りを差の三多は被付を多にあて解
和事は未だ毛めく。つゝ。や
せしりとて極て和の被付の着
難く。御門逃のまへ。主の
事はかうとすが
鴨をさへとす。かく。難
瓦麻せにうせ。石手すとす。う。瓦
沙代より二万歳。三万歳。かく。かく
乃方に在り。せき。而りたるに
秀吉壁石塔の碑。天正二年の年

月に立とて内も外の秋。

小田原山東家内傳代

トモサ

うつるくら爲事に至る所より人室

用すと即ちもと通じて人室の儀

あ候るゆえども陽に留て西にす

教」廁に取れ立事もかんせん御事

ま記く人是れの仰りより、提携

にハ前一月を定て是れ

美つり道る御事二室也。故

ノル所に百疋以後、おれ住まひ在る

ヲ繪畫する所つきよ、新しくセ

之一事の所の事は、今遣ひ出

アにはその事もあらず、其の如き

ゆ代の事もあらず、にらまうか悪こと

アハシルト民、うるはんむもき
もわい

是五郡之集記





